

令和5年度 奈良県子ども読書活動推進会議 議事要旨

日 時 令和5年8月31日(木) 10時~12時

場 所 奈良県中小企業会館 会議室3

出席者

奈良県教育委員会事務局教育次長(議長) 山内 祐司

奈良県図書館協会公共図書館部会代表
(奈良市立中央図書館長) 森西 美也子

奈良県学校図書館協議会代表
奈良県学校図書館協議会高等学校図書館研究会代表
(奈良県立高取国際高等学校長) 石澤 竜義

奈良県都市教育長協議会代表
(大和郡山市教育委員会教育長) 谷垣 康

奈良県町村教育長会代表
(斑鳩町教育委員会教育長) 山本 雅章

民間団体ボランティア代表
(図書館とまちづくり・奈良県・ネットワーク) 岡本 千鶴

学識経験者
(奈良教育大学教授) 棚橋 尚子

奈良県立図書館情報館副館長 井ノ上 晶

奈良県教育委員会事務局高校の特色づくり推進課課長代理
高校の特色づくり推進課課長補佐 辰巳 理恵子

奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課長 辻 智子

奈良県教育委員会事務局学ぶ力はぐくみ課長 熊谷 啓子

○奈良県子ども読書活動推進会議設置要綱について

本会議は、「奈良県子ども読書活動推進会議設置要綱」(資料1参照)の第8条により開催する。

○会議の公開について

本会議は、「奈良県子ども読書活動推進会議の公開に関する取扱い」(資料11参照)及び「奈良県子ども読書活動推進会議傍聴要領」(資料12参照)を規定している。この「取扱い」により、会議は原則公開とし、開催に際しては傍聴席を設け、終了後は奈良県ホームページにて議事録を掲載する。

○議長挨拶

○委員紹介

○議事要旨

(1) 令和4年度事業報告について（資料3参照）

①子ども読書活動推進会議について

令和4年度は、8月1日に本会議を開催した。新型コロナウイルス感染症の影響によりGIGAスクール構想が急速に進み、小中学校では一人一台のタブレット端末の整備、高等学校においてもBYODによるICT機器の活用が始まった中、電子書籍の利用が注目されており、国が「令和2年度子供の読書活動の推進等に関する調査研究」において実施した「電子図書館及び電子書籍を活用した子供読書活動推進に関する実態調査」から全国の自治体、奈良県内における電子書籍の導入・活用状況を示した。また、子どもの読書活動を推進するための取組を報告いただき、情報交換を行った。児童生徒の読書離れに対して、学校図書館整備と児童生徒の読書体験の機会の設定や学習における工夫が必要であることや、電子書籍に対する県としての捉え方の研究が必要であること、子どもの生きる力を育むために一番良い方法を見付けていく必要があること等の意見をいただいた。

②「子どもの読書活動推進」啓発ポスター募集事業について（資料4参照）

平成24年度から「子どもの読書活動推進」啓発ポスター募集事業を行っている。令和4年度は小・中・高あわせて39校、参加者354人から応募があり、10月の審査会で168作品中から20作品を優秀作品として選考し、11月から県内施設での展示等、啓発に活用した。

③子ども読書活動推進講座について（資料5参照）

子ども読書活動推進講座は、図書館関係者・読み聞かせボランティア、教職員等を対象に、講義・演習の形で行っている。令和4年度は「子どもの発達段階に応じた読書活動講座」乳幼児向け、小学生向け、中・高生向けの3回の講座を県教育委員会事務局人権・地域教育課主催、県立図書館の共催で開講し、のべ160名の参加があった。

④子ども読書活動推進会議専門部会について（資料6参照）

例年11月に子ども読書活動推進会議の専門部会を開催し、子供の読書活動優秀実践校・図書館・団体に対する文部科学大臣表彰の推薦に関して協議している。令和4年度、奈良県からは生駒市立桜ヶ丘小学校、大和郡山市立矢田南小学校、奈良県立青翔高等学校、桜井市立図書館、上牧おはなし会ピーターパンを文部科学省に推薦し、令和5年3月に文部科学大臣表彰が決定した。子ども読書の日の4月23日に国立オリンピック記念青少年総合センターで表彰式が行われ、大和郡山市立矢田南小学校、桜井市立図書館、上牧おはなし会ピーターパンが出席した。

⑤子ども読書活動推進フォーラムについて（資料7、8参照）

令和4年度奈良県子ども読書活動推進フォーラムを実施した。新型コロナウイルス感染症対策を踏まえ、県立教育研究所での対面及びオンライン配信のハイブリッド方式により開催し、奈良県Webサイトで資料提供を行った。

(2) 令和5年度事業計画案（資料9参照）

①「子どもの読書活動推進」啓発ポスター募集事業について

6月から啓発ポスター募集事業を今年度も実施している。現在、県内各学校に募集要項やチラシを配布し、作品を募集しているところである。ポスター審査会は10月中旬に予定しており、奈良県学校図書館協議会代表、奈良県学校図書館協議会高等学校図書館研究会代表、学識経験者、高校の特色づくり推進課長、学ぶ力はぐくみ課長、県教育委員会事務局の国語科担当指導主事、美術科担当指導主事で審査を行う予定である。優秀作品の展示は、11月上旬から県立図書情報館をはじめ奈良公園バスターミナルや教育研究所等県の各施設、市町村立図書館等において展示する予定である。

②子ども読書活動推進講座について

8月4日には、県立教育研究所にて教職員を対象とした読み聞かせの意義や実践方法について理解を深め、子どもから家庭にまで読書の楽しさを届けられるようなスキルを探る研修講座が実施された。11日、12日には、奈良県コンベンションセンターにて開催された「第23回えほん展なら」に、令和4年度の啓発ポスター優秀20作品を展示した。11月、12月には、県教育委員会事務局人権・地域教育課の主催、県立図書情報館の共催で「子どもの発達段階に応じた読書活動講座」を講演・演習の形で行う予定である。

③子ども読書活動推進会議専門部会について

子ども読書活動推進会議専門部会を文部科学省からの通知に基づき開催する予定である。令和6年度の文部科学大臣表彰推薦について協議していただく。学校・園、図書館、団体の3部門の選考をお願いする予定である。

④子ども読書活動推進フォーラムについて

子ども読書活動推進フォーラムについては、令和5年度は令和6年2月上旬の開催を予定している。

⑤令和5年度 読書活動推進事業について

6月より、文部科学省委託事業「令和5年度 読書活動推進事業」を進めている。学校図書館の利活用に係る研究成果の普及をすることにより、県内の読書活動の充実を図る。研究指定地域である橿原市で学校図書館の機能を生かした取組について実践研究し、研究成果を読書活動推進フォーラムで報告する予定である。

(3) 子どもの読書活動を推進するための取組の報告と情報交換

奈良県教育委員会事務局学ぶ力はぐくみ課長 熊谷 啓子 委員

学ぶ力はぐくみ課からは、令和5年度「全国学力・学習状況調査」の児童生徒質問紙における、奈良県内の児童生徒の読書に関わる状況等を紹介する。「学校の授業時間以外に、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか。」の質問紙項目に「全くしない」と回答した児童生徒の割合を令和4年度の調査と比較すると、小学校では1.1%、中学校では3.4%それぞれ下降しているものの、10年前と比較すると、小学校では4.4%、中学校では1.9%上昇している。これらのことから、平日の授業時間以外において児童生徒の読書離れは進んでいると考えられる。「読書は好きですか。」という質問については、肯定的に回答した児童生徒の割合は10年前より小学校で1.5ポイント、中学校で3.6ポイントそれぞれ下降している。「学校図書館・学校図書室や地域の図書室にどれく

らい行きますか。」という質問に「ほとんど、または、全く行かない」と回答した児童生徒の割合は、10年前より小学校で12.1ポイント、中学校で0.8ポイント上昇している。これらの3つのグラフから、平日の読書離れだけでなく、読書が好きな児童生徒の減少、図書館等を利用する機会の減少等の課題が見られる。各学校における、平日に読書を全くしない児童生徒の割合と、読書が好きに肯定的に回答した児童生徒の割合、また、学校図書館や公共図書館に全く行かない児童生徒の割合との相関関係を示した。それぞれにおける正・負の相関があり、平日に少しでも読書をする児童生徒を増やすためには、読書が好きになる取組や学校図書館や公共図書館を訪れるような取組を推進することも、効果があるのではないかと考える。令和4年度と比較し、平日に全く読書をしていない児童生徒の割合が減少した市町村の数とともに、小中学校ともに改善した2市の取組を示している。今後、当課では市町村の読書活動の推進に資する好事例等を調査し、県内に周知をしていきたいと考えている。

奈良県教育委員会事務局高校の特色づくり推進課 辰巳 理恵子 課長補佐

小中学校での読書の現状に加え、高校では不読率がさらに高くなっていると認識している。令和5年度は、電子図書館の導入を考えている。令和4年度の1年生から、BYODによる1人1台端末を活用して学習を進めており、1人1台端末を活用することで、生徒たちが少しでも本に触れる機会を作っていきたいと考えている。現高校3年生はBYODの導入がされていないが、e-net アカウントが付与されているので、家庭などでも見られるよう進められたらと考えている。また、新型コロナウイルス感染症など様々な状況により地域の図書館に行けない場合であっても、本が読めるという状況をつくり出せるような取組を進めていきたい。本の選定に関しては、学校の図書館、図書室との兼ね合いを考え、高校の学校司書の先生方のお力を借り、高校生に「今、読ませたい。」本や、生徒が「今、読みたい。」と思っている本を選んでいきたい。そして、電子図書館の導入を進めることと併せて、学校図書館の活性化も検討していきたい。

奈良県教育委員会事務局人権・地域教育課長 辻 智子 委員

人権・地域教育課では、地域における読書活動推進、また子どもが本と出会うきっかけづくりを担う人材の育成に主眼をおいて、県立図書情報館との共催で子どもの発達段階に応じた読書講座を開催している。資料には、これまでの開催状況を示している。令和4年度は11月から1月にかけて3回実施し、講師に和歌山大学の藤田直子先生を招いて、乳幼児段階向け、小学校向けに加え、新たに中学校・高等学校段階向けの講座を新設した。絵本の読み聞かせの実演、子どもが自ら本を手にとる仕掛けについての講義、受講者同士の絵本の紹介や情報交換などを行う交流の時間を設定した。参加者は、地域や学校の読み聞かせを行っているボランティアの方や、図書館司書、保育士、小学校、中学校、高等学校の教員、家庭教育関係者などの方々が、のべ160名が受講され、アンケートでの満足度が99.3%であった。令和5年度は、令和4年度の実態を踏まえ、より実践的な講習となるよう、1回目は理論編、2回目は乳幼児期から小学校段階まで、3回目は小学校高学年から高等学校段階までと発達段階に分けた実演、実技等の開催を予定している。各市町村社会教育担当課を通じた社会教育施設へのより一層の周知を図るとともに、講座で紹介のあった内容について図書館や学校と協働し、新たな取組を始められるという形も出てきている。様々な立場の方々との交流についても大変意味のあることであったと考え、今後は、社会教育関係者以外にもこの講座を受講できるような周知をしていきたいと考えている。

奈良県立図書情報館副館長 井ノ上 晶 委員

現在、子ども読書力向上事業として、図書館が設置されていない地域に絵本・読み物のセットの貸出を行ったり、県内の小規模図書館や小・中学校図書館などに子ども読書セットを搬送したりしている。高等学校に関して

は、生徒や職員の先生方からのニーズに合わせた資料を届ける事業を実施している。当館は2階と3階に図書館機能があるが、3階にヤングアダルトコーナーを設け、ティーン向けの書籍を配置している。特に、学校が夏休みとなる7月と8月は、中・高校生が多く来館することから、子ども向けの展示を行っており、毎年、青少年読書感想文全国コンクールの課題図書を中心とした図書展示も行っている。令和5年度は、課題図書の展示に加え、「たくさんのふしぎ」という絵本雑誌の展示を行い、図書館司書が本の内容を紹介する葉を付けた。また、「夏」をテーマに、ブラウジングコーナーという、ゆっくりと本が読めるコーナーで絵本の展示を行ったほか、昆虫の図鑑など調べ学習に使える図書の展示を行った。ほかに、令和5年はプラネタリウムができて100年目ということから、メインの展示コーナーで、プラネタリウムの紹介と星に関する図書の展示を行った。このように、当館は市町村支援を中心に子どもの読書活動を進めているが、ヤングアダルト世代に本への関心をもってもらえるような取組も実施している。「背伸び」をして大人向けの蔵書を使った調べ学習などもできることから、子どもたちに少しでも関心をもって当館を利用していただきたいと考え、活動している。

奈良県図書館協会公共図書館部会代表 奈良市立中央図書館長 森西 美也子 委員

現在、奈良県下39市町村のうち、24市町村にしか公共図書館がない。図書購入費は、ここ15年ほどで4分の3まで減らされている。職員数は、約15年前であれば半数が正規職員であったが、ここ数年で正規職員の割合が全体の約4分の1となっている。奈良市でも、72名のうち15名が正規職員、57名が非正規職員となっている。図書館によっては正規職員が1名しかいなかったり、兼務をしていたりという状態の為、子ども読書活動推進計画の策定が大事だと分かっているが、手をつけられない状態のところもある。

子ども読書活動を推進するための奈良市の取組として、公共図書館から各学校に図書館司書を派遣している。市内63校に10名の図書館司書が、オリエンテーションや読み聞かせ、先生方に授業やホームルームで活用してもらえる本の案内、本の修理、古くなった本の除籍、蔵書点検などを行っている。また、常時施錠されている学校図書館もあったことから、死角をなくすなど、書棚の配置転換を含めた刷新、集中的な整備に取り組んでいる。団体貸し出しとして、学校からのリクエスト（戦争のこと、昔の暮らしと道具など）をもとに最高100冊を2週間貸し出ししている。また、地域でおはなし会や、放課後支援を行っている団体に対しても1団体につき50冊を2週間貸し出すという事も行っている。文庫用の予算を活用し、学童保育や公民館など、地域での子ども読書活動推進の拠点づくり事業として、200冊を半年間貸し出す貸し出し文庫も行っている。図書館で定期的なおはなし会、ファーストブックの開催、ヤングアダルトコーナーの設置、中・高生が使える部屋の準備、職場体験の受け入れ、バスに図書を載せた移動図書館も年間220回、公民館など20カ所を拠点として行っている。電子図書、オーディオブックを約8000コンテンツ導入している。また、令和5年度は子ども読書活動推進計画の改定に向けてワーキングチームを立ち上げ、取り組んでいるところである。他市町村の取組として、学校図書館と公共図書館のシステムをつなげ、公共図書館の蔵書を貸し出せるようにしたり、ヤングアダルト世代の図書館利用が少ないことから、「SNSの使用方法を教える」などの交流をしたりもしている。

奈良県学校図書館協議会代表 高等学校図書館研究会代表 奈良県立高取国際高等学校長 石澤 竜義 委員

この3年間、コロナウイルス感染症の影響があり、読書会、ビブリオバトル、図書委員会等、「本が好きだ」という生徒が中心となって行う活動が制約を受けてきた。令和5年度は、多くの学校で生徒を一堂に会した読書活動の実施を計画していると聞いている。しかし、現状としては図書館の来室者数、貸出冊数ともに小中高どこも伸び悩んでいる。また、来室者が固定化している。その中には、「教室に居づらい」などの悩みを抱えている子どももおり、駆け込む場所にもなっている。生徒と本をつなぐ工夫や仕掛け、生徒と本をつなぐ活動、読書の喜びを知るきっかけ作りをしていくことが大事となっている。小学校では、例えば、おみくじで「この本を読んだら

良いよ。」などと遊びの要素を取り入れたり、司書がいる学校では、先生方のおすすめの本を紹介したり、自分が読んだ感想などを書く等、生徒と本を繋ぐという工夫をしている。読書活動の重要な場として、図書館の読書センターとしての機能を高める必要があると感じている。学校では、図書館を学習センターとして授業でも使用する。最近は、探究的な授業が多くなり、色々な調べ物を本ではなく、情報をデジタルで得ることも多くなってきている。今後は、図書館を学習センターとしても、情報センターとしてもデジタル教材を取り入れていく必要があると考える。

子どもたちの不読率が、子どもの読書活動推進の最大の課題である。この現状を打破するために各学校において色々な取組をしている。全体的な取組としては、読書の時間、朝読の時間の設定があるが、少し減ってきている。高等学校図書館研究会では、図書館情報委員会、読書推進委員会を設け、各学校の優れた取組や新しい試みなどの情報共有を行っている。司書の研究会では、選書班、読書研究班、学校図書館活用班などに分かれ、現在の図書館が抱える課題解決に向け、活動をしている。令和5年度も子どもと本を繋ぐよう、読書感想文コンクールを行う。AIによる読書コンクールに関する記事も話題となり心配されているが、優れた感想文だと思うものは、必ず自分の実体験や出来事を取り入れ、深く考えたことと作品を結び付けた感想文が多い。これは、AIにはなかなかできないと考える。

個人の感想になるが、文字離れ、読書離れはまだまだ抗えると思っている。色々な方策を取れば、もっと広げていけるのではないかとも思う。しかし、紙離れは受け入れざるを得ない。そんな時代がきているのではないかと感じている。以前、音楽がレコード、CD、配信となったように、読書においても配信の時代がくるかもしれない。しかし、ある程度配信が広まれば、逆に紙の良さを見直されるような流れも出てくるということも仕方がないのかなと思っている。

奈良県都市教育長協議会代表 大和郡山市教育委員会教育長 谷垣 康 委員

大和郡山市では、令和4年度より読解力向上プロジェクトを進めている。令和4年度は、読み解く力を鍛えるワークシート（説明文を中心）を作成し、令和5年5月から毎週1回、小学校5年生、中学校は2年生を対象に進めている。一方、情操を養ったり、人の気持ちを想像したりするには、物語やお話、詩などが必要となってくると考え、令和5年度は、本を読む子どもを増やすべく読書活動推進に取り組んでいる。学校図書館の開館状況等を見ると、小学校では昼食時間、下校時間の関係で図書館で本を読む時間が十分にとれていないことが分かった。それなら、家で本を読むしかない。「家読（うちどく）」という、子どもも大人も家で読書をする取組を行っている自治体がある。以前より学力向上と読書が関係していると言われているが、なかなか改善が見られない。本気でこの問題に取り組むには、「本を読もうキャンペーン」というような形で、学校だけでなく、家庭、ボランティア等に協力してもらい、展開することで少しは変化するのではないかと考える。学力・学習状況調査の読書時間の質問では、漫画や雑誌を読んでいる時間は除かれている。漫画からも学べることがあり、「漫画は悪いものだ。」というような考え方は古いのではないかと思う。幼稚園から小学校低学年は絵本から始まり、おはなしの世界に入り込む事が好きなのに、小学校3・4年生くらいから本から離れてしまうように思う。ストーリーを追えるのであれば、漫画も良いと思う。読書活動というものをどのように定義するか、「説明的文章」「物語やおはなし」どちらも大切だと思うが、目的が明確になっていないように思う。授業で扱ったテーマに対しての本を先生が紹介したり、同じ作者の他の作品を読む機会を与えたりすることも読書活動を広げていく一つだと思う。読書活動を推進していく上でターゲットをどこにするのか、本を読む子どもはどんどん読むが、本でなくても情報が手に入る時代に、本を読まない子に「紙媒体の本を読まないといけない。」という事をどのように説明するのか。ある調査では、本を読まない理由は「時間がない。」「文字が嫌い。」「どんな本を読むと良いかわからない。」とある。そこで、推進委員会で市の推薦図書のようなものを作れないかと考えている。好きなことと関連付け、低学

年、中学年、高学年向けのリストを作成できないかと考えている。本を読む子がもっと本を好きになることも大切だが、本を読まない子がどうすれば本を手取るか、みんなで努力し、総がかりでやるぐらいの気持ちでやらないと、状況はいつまでも変わらないのではないかと。

奈良県町村教育長会代表 斑鳩町教育委員会教育長 山本 雅章 委員

読解力の不足は、かねてからの課題である。斑鳩町では、令和4年度「読解力向上推進委員会」を立ち上げ、以降、定期的に県教委を招いて勉強会を開いている。斑鳩町では、「第4次斑鳩町子ども読書活動推進計画」に基づき、町立図書館、読書ボランティア、幼稚園・保育園・小中学校・学童保育室等による調整会議を年2回開催し、読書活動の推進に向けた協議を行っている。また、平成17年に“読書は心と心、人と人をつなぐもの”を基本テーマとした「斑鳩町子ども読書活動推進計画2005」を策定し、以降「子どもが読書に親しむ機会の充実」「読書環境の整備と充実」「読書活動の啓発と推進体制の整備（連携・協力）」に力を注いでいる。

国の「第5次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の基本方針の中から、「不読率の低減」「多様な子どもたちの読書機会の確保」「子どもの視点に立った読書活動の推進」に向けての本町の取組を紹介する。1つ目は、図書館司書を小中学校ごとに配置し、小学校では「えほんのくに」「えほんのひろば」といった絵本を通じた異年齢交流等に取り組んでいる。2つ目は、子どもの夢をはぐくむ読書活動及び図書館利用の促進を図るため、「ブックスタート」をはじめ、発達段階に応じた「子どもサービス」を進めるとともに、バスを町で借り上げ、町立・私立の幼稚園・保育園の5歳児全員を図書館に招待する「図書館ご招待デー」を実施している。3つ目は、「読書手帳（マイブックリスト）」を作成することにより、たくさんの本を読むのが楽しくなったり、友達同士で本を通じた交流をしたりすることで、自分の読んだ本を誰かに教えたいという心理が子どもの中に芽生えることも分かった。4つ目は、町立小学校第3学年の児童を対象に「図書館見学」を行っている。また、毎年、県立法隆寺国際高等学校歴史文化科第1学年の生徒には、聖徳太子歴史資料室を活用した幅広い学習が行えるようにしている。5つ目は、図書館職員、読書ボランティアが学校を訪問（「おはなし訪問」）し、第3学年児童を対象に「絵本の読み聞かせ」「ストーリーテリング」「ブックトーク」を行っている。また、本町の特徴ある取組の一つに「斑鳩町子ども司書」養成講座がある。本講座は、小学校5・6年生を対象に「読書リーダー」を育てることを目的に行っており、図書館のしくみを理解し、読書案内の手順や秘訣を学んでいる。参加した児童は、学校の委員会活動の中で、この経験を生かすことができている。

国の第5次計画の基本方針「デジタル社会に対応した読書環境の整備」では、以前「子ども模擬議会」の中で一日議員から、「図書館の電子サービスをやってもらいたい。」という声上がり、平成29年度からスタートしている。現在、登録者数は累計で1,971名、貸出冊数が7,298冊となっている。自宅のパソコンやタブレット・スマートフォンを使用して、図書館に行かずとも本が読むことができるので、忙しい利用者や高齢者、障がいがある方々から喜ばれている。今後の取組の1つ目としては、様々なジャンル、テーマの本を提供し、子どもが興味を引くような子どもの視点で考えた選定を進めていく。2つ目は、読書を楽しい活動として捉え、「楽しさを強調」した活動を展開する。3つ目は、身近な大人が積極的に本を読む姿を子どもに見せていきたい。そのためには、先生方による保護者への積極的な声掛けも重要と考えている。4つ目は、子どもたちが自由に本を選ぶ機会を作り、興味のある本を見付ける「力」を身に付けさせたい。本町には「いかるが楽（がく）」を立ち上げ、地域の良さや素晴らしさを学習する時間がある。その中でも、本の選択と活用を図る「力」を身に付けさせたい。5つ目は、読書をするのに居心地の良い「場所」と「環境」と「時間」を提供することで、地域の方や子どもたちが自由に図書館に行けるような環境整備を進めていく。6つ目としては、子どもたち同士のコミュニケーションや考えを深める場所として、「読書体験を共有」する場を作っていきたい。また、著者の講演会などのイベントを通して、読書を楽しみながら学ぶ機会を提供していきたいと考えている。

民間団体ボランティア代表 図書館とまちづくり・奈良県・ネットワーク 岡本 千鶴 委員

本団体は、発足 27 年である。図書館司書、大学の先生、民間ボランティアなどで構成しており、県内の公共図書館、学校図書館の現状を知ること、地域の情報交流、学習会、県内のまちづくりや地域の情報の発信、隔月の会報発行を活動の指針として挙げている。また、「言の葉事業」は子どもの育ちや読書活動に関わるボランティアの学習の機会として継続されてきている。県内の公立小中学校の司書配置状況も、毎年調べて会報に掲載している。学校図書館司書の全校配置が望ましく、市町村格差が縮まることを期待する。

県内ボランティアの活動では、各市町村で小学校・幼稚園・保育園へのおはなし配達が長年熱心に続けられている。例えば桜井市では年間 300 回以上のおはなし配達、田原本町では補助金で購入した本で文庫を作り、町内の小学校 2、3 年生に巡回している。奈良市や橿原市等では昔から地域の子どもの文庫活動やおはなし会が広く盛んに行われてきた。現在は、子ども数が減ったり、子どもの生活スタイルが変わって時間がなかったり、ボランティアの高齢化も進み、文庫活動が難しくなっている。

私の地元の大和郡山市では学校ごとに読書ボランティアが生まれており、読み聞かせや図書館整備などで、現役の保護者、OBと一緒に活動しているところが多い。活動歴の浅い保護者や働いておられる方など其々で、一斉にレベルアップできなかつたり、入れ替わりがあつたりするところが悩みとして挙げられている。

学校図書館司書が 5 名配置されて、現在 5 中学 5 小学校を担当している。司書がない学校では、ボランティアが学校図書館の運営を援けているところもある。ある小学校では、朝の図書館開室、蔵書点検、本の修理、飾り付け、年 2 回の絵本展開催までを担っている。絵本展では、各クラスが図書の時間を充てて全員で本を手取る機会にしているが、クイズ形式で目的の本に行きつくなどの工夫をしている。「子どもが自分に合った本を選ぶことができない」との話が先ほども出たが、そのような工夫で図書館内の本の場所が分かり、本を手に取り易くなつてほしいとの、である。

学校図書館がいつも開いており、大人がいるという状況が子どもたちにとって大事である事を痛感している。また小学校 3、4 年生の主体的読書に移行する時期に本離れが始まると思われるので、その子に応じた適切な働きかけが必要だが、担任だけにまかせるのは負担が大きい。さらに言えば、子どもたちは体験の機会が減っている。自然体験、労働体験などや、人と関わるいろいろな機会、成功体験を増やすことで、自己肯定感を育て、好奇心、想像力が広がると思う。このあたりも読書活動推進の基になるのではないかと。

学識経験者 奈良教育大学教授 棚橋 尚子 委員

県から出た資料にある「図書館に行かない子どもたちが増えた。」は、新型コロナウイルス感染症や G I G A スクール構想の影響が色濃く出ているのではないかと。色々なところで子どもの様子を見てみると、タブレットを学校から持って帰り、タイピング練習のゲームを夢中になってやっている。そのことで、あまり読書に目に向いてないように思う。また、電子媒体の話があつたが、電子媒体で何かを読むのと紙媒体で本を読むのでは脳への言葉の引っかかり方が違うということが印刷会社の調査で分かっている。電子媒体で透過光として目を通過するよりも、反射光で読む方が脳への定着率が高いというようなことも言われているので、電子媒体で読むということは少し考えていかないといけないと思う。タブレットのことから分かるように、子どもたちは読書よりも面白いことが世の中にいっぱいある。そして、その楽しいことと比べると、本を読むということは、かなりハードルが高いことである。そのハードルを低くすることを先生方からご紹介いただいたが、まずは漢字をどう扱っていくかではないかなと思っている。新井紀子先生が提示された資料では、とにかく文章が読めないと書かれている。文法的な力が足りないということが分かる。日本語の場合、文法をおさえて読むことが難しく、教科書の国語の文章は文法的に整理されている。しかし、そうではないものは、けっこういい加減である。それを読むとなると文法の力が必須であるということ、漢字の力が重要で、漢字をすらすら読めれば読書をしようとする

思う。読んだ時に漢字が多いと「もういい。」とってしまうので、学校教育の中で、漢字をもっと丁寧に扱わないといけないとかねてから思っている。奈良県のある高校で、山月記を生徒に読ませた。大人が読んでも難しいので、いつもは代替のものを扱っていた。しかし、この素晴らしい文章を読ませないのはもったいないということで、総ルビのテキストを与え、読ませたという実践である。そうすると、子どもたちが活発な議論を始めた。だから、漢字に躓かせないということが、学校教育の中ですごく大事だと思う。「大人が読む物を新聞も含めて総ルビにすればどうか」ということをある企業チームが提案され、文部科学省にも働きかけている。いきなり取り組むことはできないが、漢字をどうしていくかということを考えていくのが大事だと思う。

奈良県教育委員会事務局教育次長（議長） 山内 祐司 委員

「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づき、国が計画を更新した。県内の市町村の計画の状況は資料10の通りである。県としては、子ども読書活動が教育行政にかなり深い関係をもつものなので、教育行政の上位計画である教育振興大綱、併せて教育振興計画を県としてどうするかという議論、これから変えるか変えないかも含めて議論をする必要があるため、今年度中に、この子ども読書活動推進に関する計画を更新するという予定はない。大きな上位計画の方針が定まってから、この計画の取扱いについては決めていきたい。先程説明いただいた事情も踏まえ、各市町村で計画を未策定のところは策定していただき、更新される場合は更新していただきやすいような県の計画を考えたいと思う。内容的なことについては、この計画の基本的な方針について、新たな計画の更新としては急がないが、4点の基本方針を踏まえ、県の子ども読書活動推進という施策には反映させていきたいと考えている。

情報交換

（意見）読書活動は、大人を巻き込まないと子どもは変わらないと思う。「一緒に本を読んでください。」など、強制はできないが、教育長や知事がおっしゃるなどインパクトを与えないといけないのではないかと。

（意見）読書手帳をあちこちで作っているが、効果はどのようなものか。大和郡山市でも作っているが、それを使っている先生とそうでない先生がいる。

（意見）学校独自のスタンプカードを作っている学校もあるので、それを利用して教育長賞や市長賞をつくろうかという話もしている。

（意見）読書カードは遊び感覚である。最初は、「読書カードが欲しいから読む。」という感じで始まる。少し年齢が上がってくると、自分が読んだ本について伝えたいという気持ちが生まれる。この読書カードを取り入れたことにより、取り入れる前に比べて読書をする子どもは増えていると思う。

（意見）推薦図書子どもに作らせてはどうか。本を紹介するPOPなどを作ることにより、何を読めばよいか分からない子どものプラスになるのではないかと。

（意見）読書感想文は、書くことが苦手な子どもたちにとって負担となっている。しかし、書く力も付けていかなくてはならない。作文となると負担だが、読書手帳など、ちょっとしたコメントぐらいなら書けるのではないかと。

（意見）読書感想文は全校で強制ではなく、自由に書かせるようになっている。感想文はどんな内容を書いたら良いのか、どんな要素が必要なのかということが分かっていないまま書かせるのは酷である。優秀作品を見ると、自分の豊かな経験を基に、感想ではなく自分のことを書いているように思う。

（意見）紙媒体で読むことが大切だと思っているが、一方で社会に出た際、デジタル上で物を見て解釈をする力を子どもに身に付けていかなければならないのではないかとも思っている。作文に関しても、漢字などを勝手に変換できるので、明らかにデジタルの方がたくさん書ける。しかし、手で書いた方が深い思考が働くのではないかと。

かとも思う。デジタルの経験が積まれないと、デメリットやメリットが分からないかもしれないと思う。